2024年10月20日（日）主日朝礼拝説教

『みなしごにしない』　井上隆晶牧師
ヨハネの手紙一4章16～21節、ヨハネによる福音書14章15～23節

❶【別の弁護者を送る】

イエス様は死ぬ前の晩に、この世に残してゆく弟子たちにこう言われました。「**わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は真理の霊である。**」（ヨハネ14：16～17）父というのは神様のことです。神様にお願いして、弁護者を送ってもらうというのです。この弁護者とは「**聖霊**」といわれる神の霊のことです。ギリシャ語では「パラクレートス」といい、英語では「カウンセラー（Counselor）」、他の訳では「助け主」、「慰める者」「弁護者」と訳されます。私たちが罪を犯した時に、神にとりなし、私たちの相談にのり、イエス様のことを教え、慰めを与えて助ける霊という意味です。これらは今までイエス様が弟子たちのためにされてきたことですが、それを引き継ぐ者として聖霊を送ると云うのです。

●先日、TVを見ていたらアメリカのロードアイランド州にいる世界一優しいフランク・カプリオ裁判官（既に引退し現在86歳）が出ていました。アメリカでは有名人です。法廷にスピード違反や駐車違反の罰金を命じられた人たちがやって来ます。ある少女には6歳の子どもがいて、男から逃げるために車でスピード違反をしました。あるホームレスの女性は、車の中で寝泊まりをしていましたが車が取り上げられました。罰金を支払うことが出来ない時、カプリオ裁判官は「私の母親の基金から～ドルを援助します。他の寄付金からも～ドルを援助します。それでも支払えない時は私の所に来なさい。」と語ります。スピード違反のビデオを見て「映像がまぶしすぎて見えないので、証拠不十分のため棄却します。」といい、被告の罪を赦します。子どもを膝の上に抱いて、裁判官が持つ金槌を持たせて「君がお母さんの裁判の判決を出すんだ。お母さんは有罪ですか、無罪ですか」と聞き、子どもに判決を出させようとします。カプリオ裁判官は「私はローブの下にバッジではなく心があるのです。」「人生がどうであろうと、状況がどうであろうと人と接する時は、相手を理解する心、寄り添う気持ちを持つことが大切だと思っています。」と語ります。

日本では考えられない裁判官です。「慈悲の心、憐れむ心」が溢れていました。TVを見ていて感動し、心が温かくなりました。まるで神様の裁判を見ているようでした。聖書の神様も同じです。私たちにはイエス様と聖霊様という二人の慈悲深い弁護人がいるのです。イエス様は神様の右に座って執りなし、（ローマ8：34）聖霊は私たちの中に住んでうめきながら取りなして下さいます。（ローマ8：27）有能な弁護士がつくと、いくら罪があっても無罪になります。膨大な借金があっても、キリストという弁護士が私の借金を支払い、聖霊という弁護士が私の良い所を告げます。面白い事に悪魔は「訴える者」という意味ですが、聖霊は「弁護

する者」という意味です。修道者はこう書いています。

●「私たちが神とともにいるかどうかを知る最も確かな方法は、兄弟に対する私たちの態度がどのようであるかを見る事です。私の霊的父は人々の中に美しいもの、善いもの、本当のことしか見てはいけない、人は神の像なのだから、といつも言っていました。…ほかの人の中に聖霊を見るには、自分の中に聖霊を持たなければなりません。兄弟に悪しか見ない人は自分自身も悪の霊に占領されているのです。」（アトスからの言葉より）

❷【みなしごにはしない】

イエス様はさらに弟子たちに「**あなたがたをみなしごにはしない。あなたがたのところに戻って来る。しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。**」（ヨハネ 14：18～19）と言われました。この世の人はキリストが死ねばもう彼を見ることができませんが、弟子たちには見ることができるというのです。**イエス様は復活して、彼を信じる者に生きている姿を現されたからです。パウロも復活したキリストを目撃し信仰を持ちました。**ですから「戻って来る」というのは、復活した姿で彼らと共にいるために戻って来るということなのです。なぜ戻って来るのかというと、**キリスト無しで人は信仰ができないからです。人間の中から信心は出てきても、信仰は出てきません。キリストが信仰の本体なのです。彼と共に生きる事こそ信仰生活であり、人間の本来の姿です。ですから主は必ず戻ってきます。それが人が創造された目的だからです。**

●皆さんは「クォ・バディス」という映画を見たことがありますか。ラテン語で「主よ、どこへ行かれるのですか」という意味です。1 世紀末、ネロ皇帝によってキリスト教徒は迫害されていました。ローマからペトロは逃げようとアッピア街道を歩いています。すると目の前に復活したイエス・キリストが立っていました。ペトロは「主よ、どこへ行かれるのですか」と聞くと、キリストは「ローマにいる私の苦しむ民のためにもう一度十字架に架かりに行くのだ」と答えられます。それを聞いたペトロは回心し、向きを変えてローマに戻り、逆さ十字架にかかって殉教します。

キリストは、この世界の苦しみを共に負うために再び戻って来られます。人間の力ではもう平和を作ることは出来ません。刑務所に行くと親から縁を切られた人がいます。何度も悪い事をしたので見捨てられたのです。イスラエルの歴史を見ても神に逆らってばかりいます。本当なら見捨てられても当然なのです。**でも神は罪を犯す人とこの世を見捨てません。人間と関わり続けられます。神はこの世界を背負い続けられます。**聖書では神の名は「**インマヌエル**」といい、それは「**神はわれらと共におられる**」という意味です。**神とはどこまでも人と共にいる方なのです。**

❸【神と人間は運命共同体であること】
イエス様は弟子たちに「**わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。**」（ヨハネ 14：19）と言われました。私の好きなみ言葉の一つです。私の存在は、完全にキリストに依存しています。私たちは完全に運命共同体なのです。キリストが死ねば私も死に、キリストが復活すれば私も復活します。キリストが頭なら私は体なのです。私は木の幹につながった枝なのです。自分で生きているのではなく、キリストによって生きているのです。23 節「**父とわたしとは、その人のところに行き、一緒に住む。**」とあるのも神と人の一体を現わしています。私は神の住まう神殿となるのです。

●平山正美というクリスチャンの精神科医がいました。彼が『心の病と信仰』という本の中に「親と不出来な子」という興味深い話を書いています。「旧約聖書には、いわゆる問題児がたびたび登場する。たとえば祭司エリの息子たちである。…サムエルも二人の息子ヨエルとアビヤのことで悩んでいた。この息子たちも「父の道を歩まず、不正な利益を求め、賄賂を取って裁きを曲げた。」(サムエル上 8:3)と書かれている。モーセの兄であり、しかも彼の代弁者として知られるアロンの二人の息子たちも、神のみ旨にかなった生活を行わず、父親を悲しませている。(レビ 10:1～2)…彼らはこと子供の教育に関する限り全く自信を失っていたのではないだろうか。少なくとも彼らは、子どものことで人々の模範となりえなかった。彼らは子供のことで傷つき悩み、焦り、悲しんでいたに違いない。」「もし聖書が…道徳・倫理だけを説く書物であるならば(こんな風になったら駄目だよ)、それは…底の浅いものになるだろう。…我々が精神科医として経験したところによると、家族の中からこのような子供が出ると、たいていは批判の矢が親に向けられる。「親がしっかりしないから、あのような子供ができたのだ」…こうした子供を抱えた親を非難することで物事が解決するならことは簡単である。しかし私は、神には別の意図があるのではないかと考えている。神の受難を悟らせるために、しばしばわれわれにも問題児を与えられることがあるのではないか。」

牧師としていろんな精神障害をもった人たちやホームレスの人たちと関わる中で「なぜこの人なのだろうか」と思うことがあります。どうみても運が悪いとしか思えない、病や不幸を負わされているとしか思えない人がいるのです。それは平山先生によれば「神の受難」を悟らせるためだというのです。**その人が苦しみがあっても耐え、人を愛している姿を見ると、私たちは慰めと癒しを受けるのです。そこに神の姿を見るからだと思います。**聖パウロが「**今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。**」（コロサイ 1：24）と語るように、私たちも神の苦しみを分かち合うのです。苦しみにも意味があるのです。そして苦しみの向こうには必ず、愛の勝利があります。私が苦しむ時、キリストも共に苦しみを負っていてくださいます。それを慰めとして、キリストに似た生き方をしてゆきましょう。